

# NEWSLETTER

編集・発行 日本催眠医学心理学会

No.71 2020. 9. 10

〒162-0801 東京都新宿区山吹町358-5

(株)国際文献社

TEL: 03-6824-9370

## 日本催眠医学心理学会第66回大会のお知らせ

大会長 小泉晋一（共栄大学）

第66回大会を2020年11月27日（金）から29日（日）の3日間、六本木の東洋英和女学院で開催する方向で準備を進めていました。しかし3月頃から新型コロナウイルスの感染拡大が激しさを増し、4月7日に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が出され、5月4日に緊急事態措置の期間が5月31日までに延長されました。この措置が功を奏したためか感染者も漸減して、5月25日に全国で緊急事態宣言が解除されましたが、およそ百年前に流行したスペイン風邪の例を考えると、数か月後には第二波が到来することも予測されます。

このような見通しが立たない状況の中で大会の準備を進めてきましたが、開催の可否の判断が難しく、第66回大会実行員会で協議を行いました。その結果、新たな試みとして、オンライン会議用のアプリケーションソフトウェアとして広く利用されているZoomを用いた大会を企画することになりました。本学会の理事会などの会議や大学の授業ではZoomを利用しているものの、Zoomによる大会を開催するには検討すべき課題が多々あり冒険でもあるとは思いますが、これからの時代の流れを考えると新たな試みとして挑戦する価値はあると思います。ウイルス感染を避けるために、大会のシンポジウムや演題発表、懇親会などすべてZoomを用いて行う予定ですが、これらの内容は従来の大会と遜色のないものになるようにしていきたいと考えています。

大会のテーマは「催眠の可能性」としました。公認心理師の資格が誕生してから、今後ますます臨床実践の成果が期待され、責任も重くなることと思います。また以前よりもエビデンスに基づいた臨床実践が重視され、特定の心理技法に偏るのではなく、クライアントの症状やニーズに合わせた技法の選択が求められ、臨床実践の状況も変わりつつあります。このような状況のなかで我々は催眠を用いて何ができるのか、催眠を活用した臨床実践を発展させるためには何をすればよいのか、本大会ではこれからの催眠の可能性について考えるために「これからの臨床催眠の可能性を考える」というシンポジウムを用意しました。このシンポジウムでは各領域で催眠を用いた臨床実践をされている方をお招きして、催眠による具体的な実践例と今後の催眠の可能性について話題提供をしていただく予定です。

また、これからの催眠の可能性を考えるうえでは、催眠に関する基本的な概念の整理をしておく必要があります。メスメリズム以来の催眠の歴史は長いとはいえ、催眠の定義は未だに定まっておらず、まして催眠と深い関連のあるトランスという言葉に至ってはそれ以上に曖昧なままです。トランスについては前回の65回大会のシンポジウムで議論が起き、フロアの方々から有益な意見をいただきました。そこで本大会では「催眠について考える」という催眠そのものやトランスについて考えるシンポジウムも企画しました。このシンポジウムでは、催眠の経験が豊富なかたにご登壇いただき、経験をとおしたうえでの催眠に関するご自身の見解についての話題提供をお願いする予定です。その他にも、催眠の資格問題やミルトン・エリクソンに関する教育講演なども企画しています。

インターネットをとおしての今までとは違う大会となりますが、インターネットに接続できる環境さえ整っていれば気軽にご参加できると思います。皆様のご参加を心からお待ち申し上げます。

#### 大会概要

会期	2020年11月27日(金)～29日(日)
会場	自宅等のインターネットがつながる環境
テーマ	催眠の可能性

## ミニマムな第65回本郷大会を終えて

大会長 鈴木義也(東洋学園大学)

まず、第65回本郷大会を無事終えることができたことと会員の皆様のご協力に篤く感謝致します。「無事終えた」と言うものの、ご不便ご迷惑など多々至らぬ所がありました。

しかし、新型コロナウイルスの影響を受けなかったという意味では「無事」終えることができたと思います。その1ヶ月後に開催の予定で、私も関係している日本個人心理学会(アドラー心理学)は開催できませんでした。今から振り返ると、65回大会はギリギリの開催でした。

そもそも、例年秋に開催していた大会を会場校の事情で急遽延期し、2月という異例の時期の開催になったわけですが、台風や大雪も免れました。(以前、私が関係する別の研究会は台風で中止になりましたし、本学でこれまた別の研究会を2月に開催したときは大雪で大勢の方が来場できませんでした。)

感染症による全国の緊急事態宣言が発令されている現在(2020/5/7)、多くの方が苦しんでおられ、すべての国民が多大な影響を受けています。65回大会を開催していたのは、まるで別の時代で、感染症のための「新しい生活様式」が出現する前の時代の最後の時だったわけですね。

さて、参考までに、65回大会の運営方針について記しておこうと思います。大会長である私の大学は心理学科や心理の大学院はなく、手足となってくれる大学院生はおりません。マンパワーの圧倒的な不足を前にして、私がとった手段は、無理しない、ミニマムにする、できないことは人に任せることでした。少ないスタッフでも人になるべく無理せず、ひとりで抱え込むのでもない中庸を目指しました。このくらいのマンパワーとコストなら、地方でも学会を開くことはできると類推しています。

様々なノウハウについては、実行委員会の皆様には本当に助けられました。過去に大会を開いた経験がある先

生方がいらしたお陰もあり、様々な情報やご意見に支えられました。実行委員会として集まることも少なくし、できる限りメールで対処しました。

どうしても必要な当日の現場スタッフは、東洋英和女学院大学の長谷川先生を介して大学院生が活躍してくれました。また、私の所属するしままカウンセリングの他学会開催経験者スタッフにも手伝ってもらいました。そして、私の苦手とする経理などの事務作業は、本学会の事務を委託していて、大会支援の経験も豊富な国際文献社にお願いしました。

大会の内容も出来る限りシンプルを心がけました。研修会を1日に納め、演題発表とシンポジウムも別の1日に納めました。外国や学会外から講師を呼ぶことや基調講演なども削り、学会員だけの力でイベントを行いました。これには賛否あると思いますが、多額の交通費や宿泊費がかかる講師招聘がなかったために赤字にはなりませんでした。

その他、花を添える音楽演奏も予定していましたが、予算の都合で実施しませんでした。垂れ幕やポスターも作らず、手作りの印刷とプロジェクターで会場の案内とし、会場の配置もシンプルでわかりやすくしたつもりです。抄録集はできるだけシンプルで美しいものを目指して注力しました。特に心残りなのは、各方面への広報やチラシ送付、抄録集の広告や出展などは、もっと働きかければ増えたのではないかと思われることです。

今まで、研究会や研修会はいろいろこなしてきて慣れてはいましたが、学術大会は初めてでした。やってみて、このくらいのものだなという感触は掴むことができました。途中は見当がつけづらく、しばしば滞りました。やはり、自分でやってみないことにはなかなかわからないものだと思います。終わってみるとほっとして、今まで自分が漠然と感じていた重荷の感触が軽くなることで、それまでかかっていた重圧をよりはっきりと意識することができました。

会員がさほど多くはない本学会ですが、今後も会員の有志が全国各地で大会を主催し、サステナブルに大会を継続していただきたいと思います。高度成長時代

のように、どんどん足して豪華にしていくことはできなくても、質素で質実剛健なものでもいいのではないのでしょうか。

肝心の中身ですが、初級と中級の二つの催眠技法研修会には会員外からも多くのご参加をいただきました。その後の懇親会も参加者同士の交歓の場となりました。

翌、二日目の午前の演題発表にも2教室で7つの発表をいただきました。実践例と実証例の両分野からの興味深い発表でした。

総会と昼休みを経て、「成瀬悟策先生追悼シンポジウム」を開催しました。以前から学会の祖である成瀬先生を大会に是非お呼びしたいと強く思ってコンタクトしていたのですが叶いませんでした。けれども、シンポジストと著作・写真展示によって先生の巨大な存在感のいくばくかを肌で感じられたのは誠に幸いでした。

最後はシンポジウム「トランスの発見～その臨床利用～」でした。本学会が内向きにならず、トランスつながりで他流派と協力していくビジョンを投げかけたものでした。自律訓練法、動作法、NLP、EMDR、催眠と5つの流派の理事長や重鎮が次々と登場してプレゼンと対話を行なっていくという新しい形態を考えてみました。フロアーとの意見も活発に交わされ、催眠というものについても根本的な熟考を促されるような提案もありました。

2月2日に65回大会が終わって、まだ3ヶ月しか経っていません。しかし、新型コロナウイルスのインパクトに上書きされて大会は遠い過去に感じられます。このニュースレターが出る頃には、ウイルスのパワーが少しでも希釈され、社会を支えるサポーターである会員の皆様の力が発揮されていることを願っています。

## 第65回大会に参加して

高橋恭太郎（東京消防庁）

2020年2月1日、2日と大会に参加し、大変得るものが多く、良かったと思っています。ありがとうございます。またこのようなレポートの場をいただき、感謝申し上げます。

さて、私にとってこの大会は、一言、トランスとは何か？というテーマに収束するものとなりました。順を追って振り返ってみたいと思います。

まずは大会前。パンフレットにある「『トランスつながり』の輪が広がる場」という言葉を読んだ私は、「トランスの場」に赴くような気分になっていました。

大会1日目、参加した技法研修会中級コースの中

で、ネット動画のショー催眠を見た方などに対するインフォームドコンセント場面をロールプレイしました。ショーに限らず、スポーツ、芸術、宗教などさまざまな場面で語られる変性意識状態と、催眠性トランスとの異同について、自分なりの言葉にしておく必要があると強く思いました。

大会2日目、滝行の精神的変容の発表では「滝行における主観的意識体験の変化は、催眠における意識体験と類似した状態であると考えられる」ということをお聞きしました。滝行経験のない私は身体的危険を感じて集中しているような？日常から離れ理性から解放されているような？などと考えながら、滝行をイメージ体験しました。

DID症例の発表は、私には全く経験のない場面でしたので、本当に勉強になりました。その中で、「軽催眠状態に誘導するためにタッピングなどの両側性刺激を用いる」というお話を聞いて、右半身と左半身が解離するイメージを抱き、軽催眠状態を経験しました。

シンポジウム「トランスの発見～その臨床利用～」は、心理療法ごとに30分の枠で「バンドが次々と登場してはかわるがわる演奏するライブイベントさながらに」進行するというもので、それ自体誘導手続きのようにも感じられます。

河野式自律訓練法では、公式の前にズボンの布地などの触感を指先で味わいます。実際にやってみると、注意集中が楽に持続するように思いました。

動作法の紹介では、「催眠中に筋緊張が緩む現象を、催眠を用いずに実現する方法」とお聞きしました。ここで連想したのは、自律訓練法が言語的誘導で、河野式が身体感覚的誘導なのに、同じ現象を実現している？ということでした。

EMDRでは、覚醒レベルも脳波レベルも催眠とは異なるそうですが、「連想が起りやすい状態」というところには、催眠性トランスとの共通点を感じました。また、「連想が車窓の景色のように流れ、出てきたものは出てきたままにする」というところが、水の流れ、滝行に似ているようにも感じました。

最後に、全体の対話の中では、トランスを「自我意識が優勢でなく、自然治癒力が発揮できる状態」と説明してくださり、理解が深まりました。また「アホ顔になっている」という例えも、なるほど！と思いました。

個人的な感想ばかり書いてしまいましたが、発表の本筋の研究や、それに対する質問の視点、倫理の話、学会の歴史の話、など本当に勉強になりました。今後もさらなる勉強を続けていきたいと、改めて思っております。

## 第65回大会印象記

笠井 仁 (静岡大学)

大会に久しぶりに参加しました。何と言っても、今回は成瀬悟策先生を追悼する記念大会ですので、ぜひにと思い参加することにしました。最近では大会に参加していたとしてもフロアにいることは少なかったのですが、ひたすらフロアに留まりながら大会に参加しました。

午前中はデータにもとづく研究と、臨床実践とに分かれて演題のプログラムが組まれていました。並行して発表があるとどちらに参加するか迷うところですが、データ系の発表セッションに参加することにしました。そして、黙って聞いていることはできずに質問にも立ちましたが、少々残念な思いをしながら時間を過ごすことになりました。

それは、対象者数も少なく適切な研究デザインにもとづかず予備的な検討のレベルに留まっていたり、検討している概念が曖昧なままで、いずれもそこから何を示すことができるかがはっきりしないように感じられたからです。催眠という現象は未だに部外者から理解されないことも多く、だからこそ研究手法で足元をすくわれないように研究に取り組んでいく必要があると考えています。世界の催眠研究で、あるいは日本でも他の研究領域では当たり前に行われているように、適切な計画のもとに行われた研究について、皆でワクワクと知的な興奮を共有しながら議論を展開する場となることを願っています。

午後に入り、成瀬先生とご縁の深い鶴光代先生、斎藤稔正先生のお二人のお話は、さすがに興味深いものでした。成瀬先生が人を引きつけて話を広げていく方であったこと、厳しくも陰に陽に人を後押しする方であったことは、私が体験した成瀬先生のお姿でもありました。

斎藤先生が大学生時代に、スタンフォード大学のヒルガード研究室から若いポストドクの女性研究者（お名前を特定できないのでしょうか）が来て催眠感受性尺度の紹介をしていったというお話は、先生方のお力で日本語版が作られる背景のこととして、日本の催眠研究の歴史にとっても記録に留めておきたい事柄です。斎藤先生がヒルガードのもとに留学することになったのは、梅本亮夫先生という学習研究者のパイプがあったからこそではあるのですが、精神的に後押しをしたのが成瀬先生だったということでした。

そのあとの「トランス」をめぐるシンポジウムはまた、まとまりに欠けるように感じられました。斎藤先生が指摘されたように、さすがに65回を数える歴史をもつ学

会でトランスはこれまでも催眠に関わるテーマとして何度も取り上げられてきた問題です。これまでの議論を踏まえた展開があってもよかったように思います。バンドが次々と登場しては代わる代わる演奏する音楽ライブイベントさながらに、異なる話題が展開する形式を企画したようですが、検討しようとするトランスの定義が明確でないためにキーが定まらず、阿吽の呼吸でソロを回していくバンマスもなく、ハウスのバックアップもないまま、議論はかみ合わずに終わってしまった印象です。

シンポジストの一人の水谷みゆき先生が、発言の中で控え目にNash & Barnier (2008) に言及しながら催眠の手續きと産物と効果とを分けて考えることの大切さを指摘していました。この枠組みで考えてみると、自律訓練法、動作法、NLP、EMDR、催眠の共通点と相違点を整理できたのではないかと考えています。ただ、フロアから発言するタイミングがつかめず、登壇のどなたかが発言してくれることを期待もしていましたが、この話を拾う者もなく、話題が流れてしまったのは残念でした。

ついでに言えば、自律訓練法についての話題提供は誤解を広げてしまうことにならないか危惧しています。「重いschwer」という言葉に悪いイメージがあるというのは、言葉尻のみをとらえた理解にもとづくものです。シュルツの言う「重い」は筋弛緩を背景とするものであって、「独特なこちよい倦怠感」とも表現し、リルケの詩を引用しながら飛ぶ鳥が重力に身をまかせて自然に落ちていく感覚に関連づけられています。実践の中では、このようなニュアンスを伝えながら体感に焦点を当てていくことが重要になるはずですが、時間の都合もあって個々の発表に対してフロアからの発言の余裕はなく、その場でコメントできなかったことを後悔しています。

今回の大会の中では上記のようにいくつか論点があったように感じていましたが、それを共有する機会もなく会場を後にしてしまいましたので、大会印象記として依頼がないにもかかわらず勝手に寄稿させて頂きました。この印象記が老人の練り言と捨て置かれることなく、陽の目をみることを願っています。そして何よりも日本の催眠の研究と実践が、世界の研究がそうであるように、ワクワクと面白いものになることを期待しています。

## 催眠技法研修会に参加して

桜井憲児朗 (ダイヤル・サービス株式会社)

当学会の研修会には数年前から毎年必ず参加しているため、研修仲間のような人もできて毎回楽しみにしてい

る。その仲間内では催眠のことをデフレあるいはディスカウントなどと、経済用語の喩えを使って今のうちに学んでおくことがお得などと半分冗談、半分本気で話題にすることがある。なぜならば、複雑性PTSDがICD-11で取り入れられたり、EMDRのようなトラウマ処理の技法がエビデンスとともに注目されてきていたりする現状では、様々なトラウマ処理の技法の修得が今後必要となり、日本でもその一翼を催眠が担う可能性を秘めていると考えるからである。私は現在学校臨床を主な領域の一つとしているが、そこでさえ、知識と観察眼さえあればフラッシュバックや解離は日常茶飯事である。いわゆる切れる子どもたちの中には、容易に外傷性のトランス状態あるいは自我状態になってしまう子どもたちがいるので、それを解除する必要がある。そうした際の臨床家の声がけや振る舞いに催眠知見がとても役に立つ。そうした子どもたちに情動調整のスキルを修得させる際にも、シュブールールの振り子は遊びの一つとして応用できるし、そのときに、「大きく触れた振り子は、だんだんと元に戻る」「訓練を積むたびに、振り子が元に戻るスピードは増していく。」と言えば、交感神経が振り切れた状態から日常の覚醒状態に戻るメタファーになるので、間接暗示として働く。凍りつき反応の解除であれば、「止まった振り子は程よい感じに動きだす。」などと言えば良い。外傷性記憶にアクセスして、それを処理するまでは学校臨床の制約では難しいが、この程度の治療的介入は可能であるのが私の最近の実感である。

前置きが長くなってしまったけれども、私は特に催眠の弟子入りをしたわけでもなく、学会等の研修会や文献研究等と日々の実践を通して上述の実践ができるようになった。今回私が参加した中級研修担当の松木先生の古典的催眠から現代のリレーション（関係性）を重視した催眠への移行などの話題は、直接暗示と許容暗示の使い分けとして身体に染み込ませた。それは、「腕が下がる」と言うのか、「腕は下がるかもしれないし、そのままかもしれない。どっちでも構いません。」と言うのかの違いであって、それはクライアントの反応を観察して選択していくということが毎回の研修で強調されている。学会の研修であっても、何度も参加して自分自身が意図的にスキルを活用していけば、それは身につくことを強調したい。このあたりについては、みなさんご存知の大谷彰先生の『プロカウンセラーが教える対人支援術』などにも書かれている意図の練習を参考にされたい。

今回の研修で松木先生は、エリクソン財団の研修会で強調されていた体験喚起についてもよく話題にされていた。例えば、対人トラウマがある人は特定の人物の話題をするときに声の大きさや、声色や話題が変化することが多い。そうした際には、ネガティブなものが喚起され

ているので、非常に気をつける必要がある。学校臨床で言えば、保護者コンサルテーションにおいて相談者自身の厳しい虐待的な母親と、息子の女性担任が重なっているときに、こちらがうっかり先生を弁護するようなことを言ってしまう、カウンセラーと相談者の関係が崩れるようなことであろうか。ネガティブな体験喚起を見逃さないことでこうしたミスを防ぐことができる可能性は高まるであろう。

## 催眠技法特別研修会のご報告

企画・教育委員会委員長  
小泉晋一（共栄大学）

2019年度に開催した催眠技法特別研修会のご報告をいたします。2019年10月11日（金）から14日（月）に、六本木の東洋英和女学院で大谷彰先生の催眠技法特別研修会を開催しました。10月11日と12日が初級コースで、13日と14日が中級コースでした。最終的に初級コースには50人の参加申し込みがあり、中級コースには48人の申し込みがありました。

研修の内容としては、催眠の基本的理論や神経生理学的基礎、誘導の原則、観察とペーシングの基礎、観念運動による誘導、臨床催眠の治療プロセス、催眠による年齢退行、催眠とマインドフルネスとの関連、情動調整と自我強化、メタファーの利用など多くのことを学びました。催眠に関するエッセンスをとともわかりやすく簡潔にお話いただき、たいへん有意義な時間をもつことができました。参加者のアンケートには「講義の内容はともわかりやすく、デモもわかりやすく実演してくださいましたのでとても勉強になりました」などの感想が多くみられ、好評であったことがわかります。

研修会そのものは好評だったのですが、初級コース2日目の10月12日に台風第19号が襲来して、この日の研修会と懇親会が取りやめになったことはとても残念でした。当日は記録的な暴風雨となり、首都圏の交通機関は完全に麻痺し、各地で洪水などの多大な被害を及ぼしました。研修会は交通機関の復旧を待って3日目の午後からの開始となりました。懇親会については、大谷先生のお計らいでこの日の研修会のあとに参加者を募って実施することができました。

今後も大谷先生の研修会を開催してほしいとの要望が多かったのですが、実際のところここしばらくの間は開催が難しい状況にあります。2020年は東京オリンピックの年でしたので研修会を見送り、2021年の7月に開催することを考えて準備を進めていました。しかし新型コロナ

ナウイルスの影響で東京オリンピックが2021年に延期され、ウイルス感染が終息する気配はいつにもみられません。このような状況では予定が立てられませんので、今後のことについてはウイルス感染の終息を待ってから決めたいと考えています。次回の研修会を開催するときには、皆さまのご参加を心からお待ちしております。

## 河野良和先生追悼文

### 人生で一番大切なことを教えてくれた 師匠（最高のマスターヒプノシスト）との 出会い

阿部真里子（阿部真里子臨床心理オフィス）

日本の私設心理相談室の草分けの河野良和先生との出会いは1996年2月に遡ります。その5年前、本学会催眠研修会のアドバンス・コースを受講し、講師の河野先生の「催眠とは（人を）その気にさせることです！」という言葉が強く印象に残り「SVを受けるなら是非この先生にお願いしたい！」と思いました。その後、23年に渡り、ご指導いただけるとは思ってもみませんでした。

その当時、東京代々木の花クリニック（河野先生が勤務）で月1回日曜に開催されていた神田橋條治先生の研究会に13年間、私は参加していました。ところが、「あと1年でこの会を閉じます。ウエイティングリストの方のために誰か席を譲ってくれませんか？」と神田橋先生が仰って、私は自ら手を挙げ、お別れのご挨拶にスタッフ2名と神田橋先生の伊敷病院（鹿児島県）を訪れました。翌年9月、母校上智大学で開催予定の日本心理臨床学会で自主シンポジウム「こころと身体の接点」を企画し、「動作法」：星野公夫先生、「気功」：巖美稚子先生、「ヨガ」：J. クスマノ先生にシンポジストを依頼し、指定討論者を神田橋先生に頼むつもりでしたが、神田橋先生は「自分よりも河野良和先生に頼んでみたら？」と河野先生を推薦されました。あらかじめ手紙でお願いした後、緊張しながら河野先生に初めて電話をした時の河野先生の第一声が「あなたって美人？」というものでビックリしました。今思うと、そんな突拍子もない質問にどんな風に私が答えるかで私が「自分」をどう思っているか—自己認識の仕方（自己暗示の仕方）をアセスメントされていたと思います。

そして、「火曜研究会」という毎週開催の研究会に誘われました（この会のネーミングは成瀬悟策先生が東京教育大時代に主催されていた研究会を模したとのこと）。大久保駅に着くと、大きなカーキ色の布製バッグ（日

本酒の一升瓶が入るように、お嬢様からプレゼントされた）を肩からかけた河野先生が待っていて一緒に会場まで歩きました。研究会は毎回、「目から鱗が落ちる」体験をする衝撃的な場所で時には的確な厳しい指摘も受けました。「人生」という荒波で溺れそうなクライアントを支援するにはそれほどの覚悟と厳しさが必要と悟りました。

火曜研究会は40年以上前に、片口安史先生と河野先生が始められ、元日本大学教授の高久信一先生が世話人を今でもされています。会場も最初は河野心理教育研究所（杉並区下井草）で始まり、あちこち移りましたが、河野先生が病床に伏された5年ほど前からまた、河野先生の奥様にお願いし、河野心理教育研究所で現在も続いています。ロールシャッハテストの逐語のプロトコルを発表者が持参し、わずか2行の記載に2時間半もかけて検討することもありました。この会では「感覚訓練」が行われ、珍しい食べ物を食べ比べ、微妙な味の違いを感じ分け、しだいに、味覚が研ぎ澄まされていきます。このような繊細さや感受性、緻密さが心理臨床には必要不可欠と知りました。前述した上智大学での学会の自主シンポジウム前の約半年間、河野先生から連日、1日数回も送信されるFAXによる特訓に根を上げ、一時は逃げ出そうとすら思いましたが、無事シンポジウムは成功裡に閉じました。

その後、河野先生が敬愛する成瀬悟策先生の発案で1998年から4年間、5月連休に2泊3日の日程で青少年オリンピック記念センター（代々木）で「催眠スクール」が開講されました。両先生のデモンストレーションの後



河野良和先生（左）と筆者（2016年4月5日撮影）。

で1日中、ペアを替え、催眠誘導後に体験をシェアしました。この研修会に参加しなければ、セラピーに催眠を使えていなかったと思います。また、河野先生からの提案で、生活のあらゆる現実体験の不足から心身に不調を生じている子どもや大人対象に「現実性獲得訓練」と称して自然体験活動を栃木県の自然豊かな施設で星健彦先生と共に始めてから約20年になります。河野先生の「意識体験治療論」(旧思い治療論)によるセラピー(自己暗示療法)を学んだのもこの頃からで型にはまらない斬新な発想に最初は戸惑いましたが、この理論に基づいた自律訓練法を用いると、徐々に事象の回復が着実に進みます。本学会のある先生が「日本のミルトン・エリクソン」と河野先生を評しましたが、これほど類稀な異才を発揮したセラピストに出会ったことは後にも先にもありません。河野先生が病床で「(阿部に)ゼーンぶ(全部)引き継いだからな！」と仰った声が今も私の頭の中に響きます。沢山の方々の支援のため、学んだことをしっかりと継承していきます。最後に、河野先生のご冥福をお祈りしますとともに「人生で一番大切なこと」を教えてください。深謝いたします。

## 森山敏文先生を送る

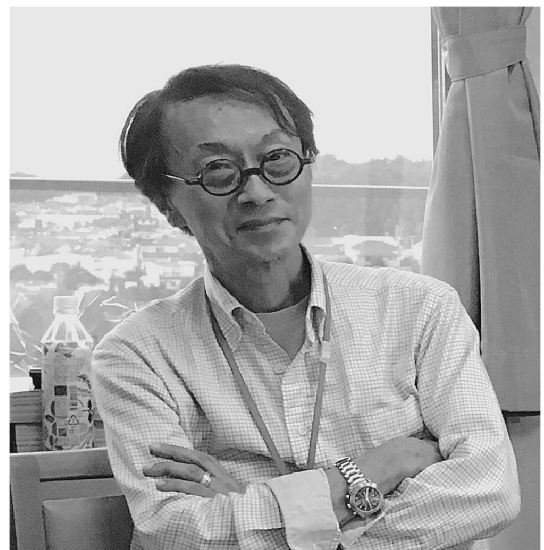
大山みち子 (武蔵野大学・広尾心理臨床相談室)

森山敏文先生は、2019年8月23日朝に、63歳で亡くなりました。6年前に腎不全のため週3回の人工透析が必要となり、2年前には加えて大腸がんのⅣ期が見つかり人工肛門となりましたが、それらをほぼ自分で管理していました。その後、発熱と意識低下が多くなり、ほとんど苦しむことなくお別れとなりました。晩年の、飄々と受け流すような病との付き合い方は、いわゆるスピリチュアル・ペインとは距離を置いたもので、森山先生らしいものでした。実際何度かICUから生還した折にも、自分で「せん妄があったよ」と若干興味深そうに振り返ってみたり、一方私が「死にかけてたんだよ」と伝えると「へえ…」といった態度で過ごしたりしていました。「できないことに真正面に取り組み苦しむ」ことのなかった彼のあり方は、大病を抱えつつもがんの痛みが少なかったお蔭でもあり、病を得た者にとってある種理想的だと感じています。同じ8月に、成瀬悟策先生が亡くなっていますが、その訃報は、彼にはお伝えしませんでした。もしあの世があるなら、互いに顔を合わせてびっくりし、語り合っていることでしょう。晩年は、室長であった広尾心理臨床相談室での臨床と自身の養生を専らにし、学会に顔を出すことは少なくなってい

ましたので、若手の先生では面識のない方もおいでかもしれません。彼は40年ほど前から継続してこの学会の一翼を担い、諸学会との連携にも力を尽くしてくれた存在でしたが、森山先生の控えめな人柄もあって、後年、彼を知る方は少なくなっていくと思います。ですので、今のうちに少し人となりをお伝えすることで追悼の意を表することといたしました。僭越ですが、若手の皆様、彼に限らず先達の努力があって、本学会の臨床と研究が築かれていることに思いを至らせてくだされば幸いです。他の学会のニューズレターでも、森山先生の追悼文が寄せられていますので、ここではできるだけ重複しないように記します。以下、私の記憶違いがありましたら、お許しください。

彼は、駒澤大学で博士後期課程まで進み、学内にいらっしやる曹洞禅の高僧の方々とのご縁が多くありました。またゼミの中村昭之先生との関わりで、九州大学関連の先生方とも知り合いが多く、本学会での活躍は、これらから端を発しています。卒業論文等は、「調身調息調心」～禅の意識状態や呼吸法について生理心理的なアプローチをしたと聞いております。佐々木雄二先生や楠本恭久先生らとともに様々な研究を進めるほか、イメージを用いた仏教の修行「観法」の研究を高橋義博先生と行うなどしています。ちなみに他の先生から聞いたことですが、大学院の入試では、彼はその分野は満点であったそうです。このように、古今東西の変性意識状態の研究に軸足を置き、またそれらを臨床に活用することを常に考えており、解離や記憶、催眠現象を扱うことや、フロイトの「万遍なく漂う注意」等に関心を寄せ、クライエントの支援に活かしていました。

臨床の場は、中村先生のご紹介で、柴田出先生のクリ



ニックに入り、そこでイメージ分析療法を柴田先生と開発するとともに、柴田先生を通して、古澤平作、蔵内宏和、前田重治、ミルトン・エリクソンらの各先生と直接・間接に触れ、それらを後輩に伝える役割を果たしました。柴田先生によるとクリニックとしては、彼が最初の常勤の弟子であったとのことで、いくつかの本学会大会は、彼が運営の中心として動いています。これらの流れから、笠井仁先生や井上忠典先生などが続いていらっしゃるのには頼もしいことです。私もこのクリニックでご縁を得て今に至っており、拙文を寄せることとなりました。

本学会以外にも、各学会の理事職のほか、「東洋思想と心理療法」研究会の世話人代表を下坂幸三先生の後を継いで勤め、また臨床心理士の開業がまれであった30年以上前から「広尾心理臨床相談室」を開設するなど、臨床と研究の分野では多くの基礎を築いています。このように、新しい潮流となる分野について早くから手掛け

てはいますが、いわゆる流行に関心はなく、軽薄なことや出世には全く縁遠い人でした。ちなみに、お元気な頃に、曹洞宗大本山永平寺貫主の宮崎奕保（えきほ）老師から、相談室のすぐそばにある永平寺別院において戒を授かっており、すでに「明敏智正」の戒名を得ていることから、一貫して意識について探求した姿勢がうかがわれます。これらの領域が広く関心を持たれる現在、時代が彼に追いついた、という言い方は俗に過ぎるでしょうか。この写真は、葬儀の遺影として用いたものです。彼が最期を迎えた新百合ヶ丘の病院のほぼ同じ個室ですが、実はまったく別の話で、私が骨折で入院中、見舞いに来てくれたときのものです。窓の向こうが自宅の方角で、この3年後に彼は亡くなりました。有為転変を学び続けた彼に、季節はずれですが一首を。「散ればこそいと桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき」さようなら、森山先生。

## ////////// 編集後記 //////////////////////////////////////

昨年、成瀬悟策先生、河野良和先生、森山敏文先生が続けてお亡くなりになりました。今日まで日本における催眠の研究と臨床の基礎を築き、本学会を設立・発展させてきた先生方です。成瀬先生については、学会誌でとりあげる予定と聞いていますので、会報では河野先生と森山先生の追悼文を掲載いたしました。

私ごとですが、本学会の広報の仕事をするのは、20年ぶりくらいになります。当時は、森山先生が広報委員長をされて、そのお手伝いをさせていただきました。ご存知の方も多いとは思いますが、今回、追悼文をお寄せいただいた大山みち子先生は、森山先生の奥様です。学会の大会で、仲睦まじいお二人の先生にお会いするのが楽しみでした。

時代が移り変わり、本学会も代替わりをしていく時期にさしかかっているようです。今後、催眠の研究と臨床がいかに発展するのか、会員のみなさまの日々の活動と学会の活性化にかかっているように思います。(井上忠典)

////////////////////////////////////

---